

## 【8】 考察と今後の課題

認識能力を高め、すすんで自己表現ができる子の育成を目指し、生活年齢を大切にした様々な取り組みを試みた。高等部では、コミュニケーションを、生活上の課題を解決する方法を学ぶ基盤にあるもの、豊かな心情を育てるものとして捉え、生活一般、課題学習、職業、日常生活の指導の各場面で研究実践を行った。

生活一般と課題学習の関わりについて、試行錯誤しながら研究に取り組み始めたばかりであり、指導者が共通理解をするところまで至っていないのが実態である。学年単位で生活一般と課題学習に取り組んだことから、学年ごとの生徒の実態の違いが学習の組み立てそのものに、大きな違いをもたらしたといえる。比較的障害が軽度である1年生は、大きな単元を基盤にして一人ひとりの課題にアプローチする学習を組み立てた。2年生は集団の特性を利用し、集団の力で社会に関わることを試みた学習と、個別のメニューによる継続的な学習の組み合わせを行った。3年生は、卒業後の生活に直接的に関わる内容を取り上げ、実習を中核に据えた学習を組み立てている。このように生徒の実態から単元を組み立てているところは、各学年に共通している。また、校外学習を多く取り入れた点についても共通している。しかし、下記のような点について大きな課題が残った。

- (1) 生徒の課題の捉え方が、果たして正しいといえるか。
- (2) 単元の組み立て、指導の内容が生徒の実態に合致しているか。
- (3) 取り組みがコミュニケーションの力をつけ、実生活で使える力になっているか。
- (4) 生活一般と課題学習との関連が生徒自身のなかで生かされているか。
- (5) 生徒の主体性を育てる授業がなされているか。
- (6) 卒業後の生活につながっていく内容が組み込まれているか。

職業については、週8時間の5コース別の実習、年4回の校内職業実習、3年生は年間5週間、1・2年生は年間2週間の現場実習の中で、働く場でのコミュニケーションの力の育成を行った。学校現場での学習が、学校外の作業所、授産所、事業所で応用できたかどうかを実習先から受けた評価から判断すると学習効果があったとはいえない。が、しかし、実習をやりとげた自信は実習後の学習に対する生徒たちの姿勢を前向きに変えていった。

個別に行われた日常生活の指導は、個別メニューの内容と、それが継続できたかどうかによって成果が大きく異なったことから、言語の専門家の適切な指導を受けることの重要性が明確になった。

各研究場面で共通して言えることは、主役である生徒たちが、コミュニケーションの必要感、楽しさが体感できて初めて意欲的に学習に参加でき、また学習効果もあがるということである。必要感を引き出す学習の構成が重要であり、そのためには、生徒の生活環境、言語環境の実態把握が今以上になされなくてはならない。障害があるが故に家庭で子ども扱いをされ、言葉や動作で分かるように表現していなくても許される環境こそ、コミュニケーションの力を育てる上での大きな障害といえる。

又、様々な取り組みによってどこまで力がついたかを評価する基準についての研究と、発達段階に応じたコミュニケーション指導内容表の作成が今後の大きな課題であることは言うまでもない。